

高機能自閉症の子どもたちの「ぎこちなさ」についてまとめてみました。個人差があり、年齢によっても大きく変わっていくので、この症状があれば自閉症だということは言えませんし、この症状が無いから自閉症ではないということも言えません。気になるところは、主治医の先生に確認してくださいね。文字ばかりで読みにくいと思いますが、がんばって読んでください。

高機能自閉症スペクトラムの幼児期の特徴

—ぎこちなさという観点から—

太子道診療所 小児科 出島直 2014年4月

1、からだのぎこちなさ(不器用さ)

<保育所健診>

保育園や幼稚園では、年に数回、健康診断を行います。おなかの診察のときは、あおむけに寝てもらいます。そのとき、目印になるように、枕を置きます。2歳児のクラスでは、枕を気にせず、いろんな場所に勝手に寝転がる子どもいます。3歳児・4歳児と年齢が上がるにつれて、だんだんと枕の上に頭を載せることが上手になっていき、5歳児のクラスでは、多くの子が、ちょっと枕を見ただけで、ころんと寝転がると、ちょうど枕の上に頭が載るようになります。

ところが、5歳児でも、時々変わった子がいます。四つ這いの姿勢で枕に近づき、枕に頭をくっつけて、そこから寝返るように仰向けになるのです。たいてい、にやにやしていますので、「ふざけないで、ちゃんとしなさい」と、厳しい先生から叱られます。

しかし、彼らはふざけているわけではありません。自分のからだの大きさがつかめていないので、枕に頭を載せるために、どこにお尻を置けばいいのかが、直感的にはわからないのです。それで、まず、頭を枕につける方法を編み出したのです。自閉症スペクトラム児も、多くの子は、自分がみんなと同じようににはできないことを感じるようになっていきますので、笑ってごまかす技も身につけてきて、にやにやしているのです。

<道具を使う>

テニスラケットを初めて持たせたときに、ボールをラケットの打面のあたりに当てようとするのがふつつですが、なぜか、ボールを手当てしてしまう子がいます。「ふざけている」と叱られます。

そういう子たちは、棒を持って遊ぶときに、あちこちに棒を当ててしまいます。コップを棚に載せるときに、コップの底のあたりを棚板にぶつけたりします。やっぱり叱られるのですが、みんなと同じように注意をしているだけでは、どうしてもぶつけてしまうのです。

<感覚運動の特徴>

真剣にやっていないから、そんなことをするのだと思われてきたのですが、彼らに身体感覚の未熟さや困難さがあると考えられるようになってきました。

自閉症スペクトラムの人たちの感覚運動の分析と当事者の発言から、自分のからだの大きさや手足の長さを直感的につかめるようになるのが遅かったり、大人になっても直感的にはつかめない人がいる、肘や膝の角度がどうなっているか感じ取るのが苦手な人がいる、こたつの中に足を入れて自分の足が見えないときに自分の足が無いと感じてしまう人も、などのことがわかっています。

2、感覚のぎこちなさ(不自然さ)、敏感さと不安定さ

<音>

ガンガンと、積み木を叩いてうるさくしている子がいます。そこに、友達がやってきて、同じようにガンガンと叩き始めます。すると「うるさい」と怒ります。なんて身勝手な子なのでしょう。

でも、人間の感覚は不安定なものです。大人でも、子どもの泣き声を聞いたときに、イライラしていると、とてもうるさく聞こえて、怒ってしまいます。自分の気持ちが穏やかなときには、どうしたんだろうと心配になったり、かわいそうに思ったりします。「うるさい」と怒った子には、自分の立てた音は心地よく、友達の立てた音はうるさく聞こえているようです。周囲からしたら、同じ音に聞こえても、本人には、友達の立てた音は、耳にうるさく響いているようです。

<偏食>

味覚や食感も不安定なものです。風邪をひいたときに、いつもと違う味や食感がして、いやな気持ちになることがあります。同じものでも、緊張して食べると全然おいしくない、ということも誰もが経験することだと思います。

逆に考えてみましょう。見た目は同じなのに、変な味がすると不安になるでしょう。自閉症スペクトラムの子たちは偏食という問題を抱えていることが多いです。その中に、白ごはんとうどんと豆腐しか食べないという子がいます。そう「白いものは安心」ということを彼は学習したのです。そういう子たちは、気持ちの不安と感覚の不安定さが悪循環しやすく、安心するのが苦手なのです。

おいしそうな顔をして食べている人を見たときに、おいしいという気持ちが自然にわいてくる人は幸せです。おいしいよと言ってくれたら安心して食べてみたくなる人も幸せです。共感する力と言語化する力が弱かったり、遅かったりするものが、偏食をもたらしている側面があるのです。

自閉症スペクトラムの子たちも、小学校半ばくらいで偏食についての問題が少なくなっていく子は多いです。どんな味がして、どんな食感がするから、食べられないかを言葉で表現できれば、周囲も理解してくれる可能性が広がりますし、相手も加減してくれます。運動能力の面も関係していて、いやなものを早く呑み込んでしまう能力の発達も、遅めのことが多いのですが、小学校半ばくらいで、その技が身につくことが多いようです。

3、医者嫌い

自閉症スペクトラムの子どもたちの中には、医者嫌いの子が多いです。好きな子はいないという意見もあると思いますが、同じ年齢の子たちと比べて、極端に拒否して暴れたりする子が多いのです。その理由を、からだや感覚のぎこちなさから説明してみましょう。

のどの動きがぎこちない。口の診察をするときに、少し舌を押えただけで吐いてしまう子がいます。がんばって口をあけようと努力するのですが、がんばりすぎて、のどが変になって、舌を押える前から、えづいてしまう子もいます。そういう子の話を親御さんに聞くと、あかちゃんるときから飲み込むのが下手だった、吐きやすかったということが、よくあります。そういう子たちは、薬(いやなもの)を飲み込む技を身につけるのも遅いことが多いです。

感覚が不安定。注射を極端に嫌う子がいます。小学校半ばになっても注射となると暴れる子がいます。そういう子の話を親御さんに聞くと、夢中で遊んでいるときに怪我して血が流れていても平気なときもあるということが、よくあります。感覚が不安定なために、今日はどのくらい痛いか、わからないという不安から恐怖感を持ってしまって、年齢にそぐわない暴れ方につながっているようです。なお、一般の大人を対象にした研究で感覚の不安定さを明らかにしているものがあります。看護師さんの研究で、血の検査をするときの痛みについて「痛いですよ、我慢してくださいね」と言ってから採血すると、世間話をしながら採血したときよりも、痛みが強いという結果が出ています。

医者嫌いの子の中でも「わたしは、怖くて暴れてしまう、でも診察しなくてはいけないことはわかっている、だから、しっかりと押さえてください」というところまで、行き着いてしまう子もいます。健気とも言えますし、哀れとも言えます

し、医者として辛いとも思います。

本人が安心感を持てば、ぎこちなさも少しましになり、感覚の不安定さも少しましになり、苦痛が少なく診察を受けることができ自信がついていくというふうに取り組めたらいいと思います。そのために、絵を見せて何をするかを本人にわかりやすく伝えるなどの工夫をするようにしています。ぎこちなさも不安定さも個人差が大きく、それまでの本人の経験の中で恐怖感が強く植え付けられている場合も多いため、簡単ではありませんが、工夫を続けたいと思っています。

4、気もちのぎこちなさ(不自然さ)

<保育所健診>

診察を受けるのが苦手な子たちの中で、なぜか、朝からテンションが高く、はしゃいでいる子がいます。そうです、今日は、保育所健診の日なのです。嫌なことがあるのなら、沈んだ顔をして先生に健診が怖いと言えればいいのですが、自分で自分の気持ちがわからない、上手に言えない、興奮してしまう子が多いです。そして、叱られて、悪循環の中で、健診の時間になってしまい、大暴れになってしまい、さらに叱られることになってしまいます。

<真剣な話の邪魔をする>

保健所に親子で来てもらって、自閉症の診断や説明をする場面です。保健師さんが親御さんから話を聞き、子どもの簡単な観察をした後で、医者が親御さんと話をする部屋に移動します。子どもには、さっきの部屋で遊んでいいよ、と告げるのですが、たいていは、嫌がって、親御さんの側にいます。医者と親御さんの話がはじまると、部屋をうろろしながら遊び始めるのですが、真剣な話になればなるほど、テンションが上がっていきます。遊び方が乱暴になります。笑顔で話の邪魔をしにきます。

そして「真剣な話をしているのに、何で笑ってるの。親の情けない気持ちが通じない。」と叱られ、嘆かれてしまいます。

でも話が終わりに近づくと、すっと醒めて、帰り支度をして、さっさとバイバイする子が、結構います。そうです、多くの子は空気を読んでいます。自分にとって嫌な話をしているな、帰ろうと言っても怒られたな、どうしていいかわからない、という不安な気持ちが興奮という形で現れているのです。

自然に行動できる子は、悲しそうな顔をして、話をやめてほしい、帰りたいと表現するのですが、自閉症スペクトラムの子たちの多くは、そういう行動を自然に学習することが苦手で、裏目にでるような行動をしてしまいがちです。

不安なときに興奮してしまう、しんどいときに頑張りすぎてイライラしてしまう、そのために周囲に理解してもらえない、理解してもらえないから、余計に興奮してしまうという悪循環に陥りがちです。

5、急ぐことが苦手

保育園などで見ていると、2歳の子に急げと言っても意味がありませんが、3-4歳になってくると、急ぐことができる子が多数派になってきます。ところが、自閉症スペクトラムの子たちは、5-6歳になっても、上手に急ぐことができない子が多いです。

急ぐように言われてもどうしていいか、わからないので、「急げ、急げ」と言うばかりで踊っている子、焦ってしまって普段以上に不器用になっている子、一つ一つ頑張ろうとこだわって順番通りでないといライラしてしまっている子、「ぼく急げない」と明確に主張する子など、様子はいろいろですが、急かせば急かすほど遅くなってしまいます。

急ぐためには、脳の中で運動を自動的に行うことに関わる小脳が発達することが必要だということがわかってきまし

た。自閉症スペクトラムの子たちの中に、小脳の発達が遅かったり、小脳の働きが弱かったりする子が多いようです。焦ることと叱られることが悪循環してくると、急げと言われただけでパニックになる、果ては、急がなきゃと思っただけでパニックになってしまう子もいます。

まだ急ぐ能力が発達していないのですから急かしても無駄ですし、無駄どころか有害になってしまいます。個人差がありますので、解決策はひとりひとり違うのですが、焦ると悪循環になることは共通しています。

ひとつひとつ順番に指示する、焦っているときには手伝う方が良いでしょう。できれば焦る前に手伝ってしまった方が本人に余裕ができて、途中から自分でさっさとできる場合もあります。大人でも、急ぐときには、すべきことを書いて、気持ちを整理して、一つ一つ順序よくやっていくという工夫をしている人がいますね。実は、そういう人たちは、急ぐことが苦手であったり、いくつものことを同時に処理することが苦手なために、自分なりに工夫して、急ぐ技を身につけているのかもしれない。

6、ことばのぎこちなさ・会話のぎこちなさ(厳密すぎる、習熟していない)

<ありがとう>

小児科の診察が終わったときに、親御さんは、子どもに「ありがとうと言いなさい」と促します。ありがとうと、素直に言える子も多いのですが、困った顔をしている子もいます。親御さんは、子どもを叱ったり、躰ができていなくて申し訳ないという顔をしたりします。そういうとき私は「ありがたいと思ってないものね、バイバイ」と声をかけることが多いです。そうすると、ちゃんとバイバイと挨拶ができる子が多いです。

4、5歳の子にとって、小児科の診察がありがたいはずがありません。なのに、「ふつう」の子は、ありがとうと言えます。不思議ですね。

「ありがとう」という言葉の意味を、彼らは、どうとらえているのでしょうか。欲しいものをもらったときに使う言葉として覚え、嬉しいときにも使うことがわかり、そこから発展して、嬉しくはないけど感謝の気持ちを相手に伝えるという使い方をするというふうに、だんだんと理解していくのではないのでしょうか。

一方で、いとも簡単に「ありがとう」という言葉を使いこなしている子もいます。その子たちは意味を考えているのでしょうか。お母さんがありがとうと言えば、自分もありがとうと言う。そうすれば、お母さんも相手も機嫌がよくなるというふうに学習してきたのだらうと思います。

<ごめんなさい>

人にぶつかったときに、ごめんなさいと言えない子がいます。素直でないと叱られます。躰がうまくいかないと嘆かれます。彼らの言い分を聞いてみましょう。「だって、その子が、そんなところにいるから悪い」、自己中心的だと叱られます。「だって、ぶつかろうと思ってぶつかったんじゃないもん」、口ばかり達者になってと叱られます。

「ごめんなさい」という言葉の意味を、彼らは、どうとらえているのでしょうか。悪意を持って、悪いことをしたときに使う言葉と考えているようです。悪意は無かったので「ごめんなさい」と言わないのです。ごめんなさいという言葉には、別の使い方があり、相手が嫌な気持ちになったことに対して残念に思っていることを伝えるという学習をまだしていないのです。

私の同僚で、上下関係に厳しい上司に、よく叱られていた人がいます。彼は、上司に何かを言われたときに、ごめんなさいを素直に言えませんでした。彼は、こどもの頃から、親に「自分が悪いことをしたということを本当に思うまで、ごめんなさいと言うな」という躰を受けてきたのです。「(とりあえず)ごめんなさい」と言ってしまうと、余計に叱られて育ってきました。そして、「相手によって態度を変えるのは、人間として卑怯なことだ」と教えられてきたのです。

一方で、いとも簡単に「ごめんなさい」という言葉を使いこなしている子たちは、まわりの人の使い方を真似ながら、

まわりの人の反応をみて修正していくので、場面に合わせた使い方と態度を、自然に身につけていくようです。

<ことばの学習・会話の学習>

習うより慣れる、と言われます。英語を勉強するなら、テキストとテープではなく、アメリカ人と友達になれ、と言われます。あんまり意味を考えずに、使いながら慣れていく方が、早く使えるようになるということだと思います。

自閉症スペクトラムの子どもたちの中に、知的な能力としては遅れていないのに、言葉の発達が遅い子が多くいます。あんまりしゃべらなかつたけど3歳をすぎて急にしゃべり出したという子たちがいます。また、2歳ごろから、盛んにしゃべっていたけれど宇宙語のような感じで意味がわからなかつたのが、3-4歳になって、急に意味が通じるようになったという子たちもいます。

以前は、そういう子たちの中に、親の発音と違って、標準語を使う子がいました。彼らは、周囲の人からではなく、テレビやビデオから、言葉を学習していたのです。今は、テレビやビデオも、きちんとした標準語が使われていないことが多いので、違いが際立たないことも多いようです。そして、周囲の人たちの発音と違って標準語の発音でしゃべるようになった子たちの中で、だんだんと周囲の人たちの発音を学習して使えるようになる子もいれば、はじめに覚えた発音をずっと使っていく子もいます。

言葉の発達が遅れていたけれど、途中から急に言葉を使えるようになる子たちは、なんとなく、とりあえず、周囲の人の言葉に慣れていくのが苦手で、独力で学習していくために、慣れるのが得意な子たちに比べて、言葉の発達が遅いのです。

さらに言えば、言葉は発達しても、会話が発達するのは、もう少し後になることが多いようです。

保育園から子どもが帰ってきたときに、お母さんが「今日、どうやった？」と聞きます。正しい答えは「楽しかったよ」です。いとも簡単に「楽しかったよ」と答えられる子が、素直な子です。「・・・」と沈黙してしまう子は頼りない子、「どうやったって、何が？」と聞き返す子は素直じゃない子、ということになります。

急に「どうやった？」というメールが来たときに、正しい答えは何でしょう？正しい答えを出すのは無理ですね。相手はだれかを確認し、その相手と自分の関係を考え、相手の関心は何かを考えないと返事は書けません。「どうやったって、何が？」と聞き返す方が、もっと単純で素直な反応とも言えるかもしれません。

7、ミラーニューロン

ミラーニューロンのミラーは鏡、ニューロンは神経細胞・神経回路のことです。その働きを単純化して言えば、見たものを鏡に映したように、そのままに脳の中で再現する働きです。見たままに身体を動かすことが上手か苦手かに関わっているため、からだのぎこちなさにも関係してくる。無意識に同じ表情になる中で共感が育つ側面にも関係してくる。「習うより慣れる」ことが上手かどうかにも関係してくる。

自閉症スペクトラムの人たちでは、ミラーニューロンの働きが弱いということがわかってきています。そのため「なんとなく、とりあえず、というのが苦手で、いろんな面で、ぎこちない」ということにつながっているのです。ミラーニューロンの働きは、年齢によっても変わっていきますし、個人差も大きいので、まだまだ研究途上にあるようですが、ここまで述べた子どもたちの行動の特徴のいくつかを説明できると思います。

一方で、ミラーニューロンが弱いことは、自分で見て、自分で考えて、自分で納得するのが大事であり、周囲に流されないという人間として大事な資質につながっている面もあります。

おわりに

保育士さんの学習会を元にまとめたので、奇妙な行動や困った行動が、なぜ生じてくるのかという観点での話が多くなりました。しかし、ぎこちないから一生懸命練習する子もいる、鋭敏な感覚を活かす子もいる、言葉を厳密に考える力が発達していく子もいる、急げないから段取りを組む力が伸びる子もいる、人の気持ちを何となくわかるのは苦手だから真剣に人の表情を観察し真剣に話を聞けるようになる子もいる、というふうに、苦手なことを長所として活かしている大人の自閉症スペクトラムの人たちも大勢います。

大事なことは、混乱しがちな幼児期に、本人の特徴を知り、本人の感じ方や考え方を理解し、ぎこちなさと不安や緊張が悪循環しないように、手助けをしていくことだと思っています。

参考文献

岩永竜一郎 自閉症スペクトラムの子どもへの感覚・運動アプローチ入門 東京書籍

ニキ・リンコ、藤家寛子 自閉っ子、こういう風にできてます！ 花風社

滝川一廣、他 発達障害と感覚・知覚の世界 日本評論社

滝川一廣 「こころ」はどこで育つのかー発達障害を考える 洋泉社

小道モコ あたし研究2 クリエイトかもがわ

今井むつみ ことばの発達の謎を解く 筑摩書房

マルコ・イアコポーニ ミラーニューロンの発見 早川書房

吉田友子 「その子らしさ」を生かす子育て 改訂版 中央法規

ローナウイング あなたがあなたであるために 中央法規

しーた 発達障害 工夫したい支援したい 学研

要旨

自閉症スペクトラム児は、対人関係・コミュニケーションに問題があり、こだわりのために奇妙な行動をし、多動・不注意などの特徴を持つことが多く、パニック・暴力などの問題を抱えているというような現象面での基準によって診断されてきた。しかし、近年、自閉症スペクトラム児の様々な特徴の根底に、脳機能の問題があることが想定されてきた。また、当事者の発言などから、本人の感じ方、考え方、感覚や運動の特徴も、その多様性も含めて、明らかにされてきた。ここでは、高機能自閉症スペクトラム児の幼児期に焦点を当て、「ぎこちなさ」が彼らを理解するための手がかりになる可能性を論じる。なお、本論は、2013年7月にパーチェという児童デイサービスの主催で行われた保育関係者の学習会での講演内容をもとに、補足・再構成をしたものである。

Key Word 自閉症スペクトラム、ミラーニューロン、ぎこちなさ

謝辞

本論を作成するにあたり、多くの示唆を与えていただいた太子道診療所の佐々智子先生をはじめ、木津川市、京田辺市の発達相談員の方々、診療所看護師、保健所保健師の方々、保育園、幼稚園、療育関係機関の方々に感謝します。